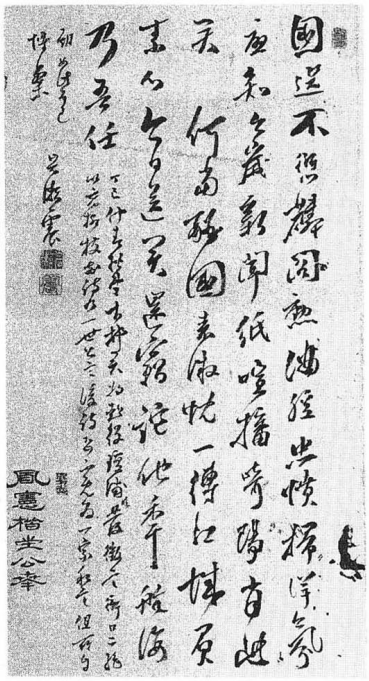
港の開のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地　〒231　電話(045)201-2100
発　行　日/昭和63年5月11日
印　　刷/㈲三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第630036号　類別・分類B-BE160

万延元年(一八六〇)の遣米使節に随行した軍艦咸臨丸の提督・木村摂津守と、その長男で海軍士官であった木村浩吉の資料が、このたびご子孫である木村昌之氏から当館に寄託されることになりました。詳しくは新刊『木村芥舟とその資料』(資料集)にゆずるとして、その一端を紹介します。



新資料紹介
木村摂津守(芥舟)資料の寄託

日本の開国・横浜の開港の歴史にとって忘れることのできない一人として岩瀬忠震をあげることに反対する人はおそらくいないだろう。開国・開港の必要を論ずるとともに、安政五年(一八五八)には自らアメリカをはじめとする通商条約の締結に心血を注いだことはつとに知られている。しかし、時あしく起こった将軍継嗣問題にまきこまれ、安政の大獄の犠牲者となり、やがて病を得て文久元年(一八六一)、四四歳の若さで世を去った。

岩瀬と永井尚志との交友はよく知られているが、岩瀬にはほかにも気を許すことのできた人物がいた。昌平黌の後輩でもあった木村摂津守その人である。これまで木村との関係についてあまりとりあげられることはなかっただけに、このたびの寄託資料はその意味からも注目される。

誌面に掲示した写真はおそらくこれまであまり一般に知られることのなかった資料である。かつて『江戸』という雑誌に口絵として掲載されたことはあるが文字が小さくて判読は難しい。

内容は、木村が安政四年(一八五七)、監察として長崎に赴任するにあたって、木村の僚友・先輩が寄せ書きした送別の辞である。このなかに岩瀬の送別の詩がある。漢詩の出来、不出来については門外漢のためよくわからないが、文中に「新聞紙」という用語を使用していることに注目したい。

この用語の使用例から想像するに、岩瀬は開国後の、なにかと喧騒をおびた状況のなかにあって、新聞つまりニュースをまとめた情報紙を駆使して政治・外交政策の判断材料としたのではないかと考えさせられるのである。この新聞紙はもとより日本のものでなかった。それではどこで発行された新聞かということになるがこれからだけでは即断しかねる。

ところで、彼の書簡によれば、彼は「英人の漢文」物を重視していた。つまり、英国人の著作を漢文に翻訳した物を欲しがっていたわけである。別の書簡によれば、岩瀬が「遐邇貫珍」を所蔵していることがわかる。これは香港の英華書院が発行した漢文の月刊誌で、英国人宣教師が編集したものである。ただ、これが岩瀬ひとりの所有物であったかというとそうではない。長崎に入る唐船によって幕府にもたらされており、岩瀬のほかにもこれに接することができる人はいた。密かに筆写している例もある。また、彼の同僚はすでに岩瀬とは別ルートから入手していた。言うまでもないが「遐邇貫珍」だけが情報源であったわけではない。

したがって、世界情勢と情報という関係にあっては必ずしも、岩瀬の独壇場だったというわけではない。その意味からいえば、とりたてて岩瀬と新聞との関係を強調する必要はないのかもしれない。だがそれにしても、開港前の段階において、岩瀬が日本を取り巻く世界の情勢理解にあって新聞に注目したこと、ことに長崎に赴任する清新気鋭の後輩を送る言葉のなかにわざわざ表現してみせているところに、外交の世界ではなばなしく活躍した岩瀬という人物がよくしめされているともいえるのではないだろうか。

寄託資料のなかには、木村の渡米にあたって岩瀬が贈った扇面もある。自ら海外へ赴くことを願っていた岩瀬はこのときすでに蟄居の身であった。岩瀬と、岩瀬を敬愛していた木村の心境はどのようなものであったろうか。

(阿部征寛・伊藤久子)

『サムライ　太平洋を渡る』展によせて
木村芥舟とその資料について
――木村昌之氏を迎えて――

このたび、開港資料館は咸臨丸提督だった木村摂津守喜毅（のちに芥舟と号した）とその子息浩吉に関する貴重な資料を、そのご子孫である木村昌之さんから寄託していただくことになりました。今回の特別展示『サムライ　太平洋を渡る』には、たくさんの資料が出陳され、そのほとんどが未公開でもあったことから、観覧者には心から楽しんでいただけるのではないかと期待しています。

そこで今日は、木村昌之さんをゲストにお迎えし、曾祖父喜毅を中心に、木村家に伝わるエピソードなどをお聞きするとともに、開港論者として知られる岩瀬忠震や海軍の創設に関わった勝海舟などの話もあわせてお聞きすることにしました。

――さっそくですが、木村さんは、ご当家の何代目にあたられるのでしょうか。

木村　ちょうど一〇代目です。曾祖父の摂津守が七代目ですから。

――木村さんがお生まれになった時には、摂津守はもう故人であったわけですが、曾祖母のやえさんはいかがだったのでしょうか。

木村　私は大正五年生まれで、摂津守が亡くなったのが明治三十四年ですから当然逝っていました。摂津守の妻、つまり私の曾祖母のやえが亡くなったのは大正七年ですから、まだ存命でした。

――ひいおじいさまが、提督として咸臨丸で太平洋を横断したことを木村さんご自身がお知りになったのは、いつ頃のことですか。

木村　あまり記憶がないのですが、小学生の頃に祖父の浩吉から聞かされたのだと思います。祖父としては、長男、次三男を亡くしていまして、孫の私を将来の木村家の跡取りとしていろいろ教えこもうとしていたようです。

――おじいさまからはどんな話を聞いていらしたのですか。

木村　咸臨丸の提督木村摂津守の家系だから人に後指を指されるようなことがあってはいけないと、しょっちゅうきつく言われていました。きちんと正座をさせられて聞かされたものです。

――その時に聞かれた摂津守の印象はいかがだったですか。

木村　歴史的な事柄はあまり聞いていないような気がします。ただ、家に飾ってある咸臨丸の絵などはよく見ていました。鈴藤勇次郎が描いた例の絵です。その原本は海軍館に寄贈したのですが、その後行方がわからなくなっています。摂津守の写真は飾ってなかったと記憶しています。

木村昌之氏

――摂津守の人物像をいろいろと考えてみているのですが、写真から受ける印象は、いかにも温厚・誠実・冷静といった感じがしますね。これは史料の上からも裏づけられると思うのです。『万延元年遣米使節史料集成』（第四巻）にアメリカに渡った時の日記が収められていますが、この冒頭に咸臨丸に同乗して航海を指導したアメリカのブルック大尉のことがでてきます。すなわち、「自分は海軍の創設に関係したが、日本の海軍は、日が浅くとても自力で太平洋を横断することはできないので、何としてもブルックに乗艦してもらわなければならない」とあり、自分の分及び自分たちの実力に対して冷静かつ客観的に見ることができた人物という感じがします。

木村　そうですね。用心深い性格だったのではないですか。浩吉おじいさんもそういう性格でしたから。たぶんその用心深さからブルックさんを頼んだのでしょう。周りからの要請でなく自ら頼んだことは、日記などからはっきりしていますね。

――なお、日記には、手柄話めいたことは極力省かれていて、ブルックの力なしには航海できなかったと称賛しています。摂津守の沈着冷静な一面が如実に示された場面ですね。

木村　自分がトップに立って大勢の者を連れて行くとなれば当然の判断だったと思いますね。それにブルックさんは穏やかな性質の方だったようで、摂津守ともうまくやっていたようです。

――ところで、摂津守が太平洋を横断した時は三十一歳で、遣米使節団七十七人と咸臨丸の乗員九十六人のおおよその平均年齢の三十三歳よりも多少若かった。

木村　そうそう。艦長の勝海舟が三十七歳、福沢諭吉が二十七歳、ブルックが三十三歳だったんです。

――勝のようなうるさ型の年上の人を抱えながらたいへんだったようですね。その咸臨丸艦長の勝海舟との関係ですが、摂津守も勝の扱いにはてこずったという話が残っています。

木村　勝は年齢が上だし、ひがみもあったんでしょう。

――摂津守も気をつかって位を上げてやろうとしたが、どうしようもなかったようです。

木村　勝はことごとに摂津守に反対していて、例えば咸臨丸のマストに日の丸をあげ、後に木村家の松川菱の紋章をあげようとしたことにも反対したようですし、アメリカに着いて礼砲を打とうという案にも賛成しなかったのですね。

――礼砲は、うまくいったようですね。勝は艦長だし、提督の摂津守としては何かと相談しなければならないのに、話をしないんで困ったと書いています。

木村　勝は船に弱くて、船酔いを起して寝ていたということですね。

後のことですが、咸臨丸がアメリカで修理で世話になったマクブーガル氏が文久二年に来日して、摂津守と会っていまして、その時、木村家に招待しようとしたが認められず、外国奉行や目付の立会いのもとで、越中島の調練所で勝麟太郎らと一緒に面会した。その時に出した食事が、勝の指示があったわけでもないのでしょうが、ゆで卵とさつまいもという、たいへん粗末なものであったので木村が怒ったと書かれています。それで、木村家から蒔絵、刀、印籠、軸類など精一杯のお土産を差し上げたそうです。ブルックさんにも土産を託しています。

木村喜毅
慶応元年(1865)大坂にて

――アメリカで受けた歓待に引き比べずいぶんな応対ですね。ブルックさんとの関係はその後どういうことがあったでしょうか。

木村　大正二年にブルックさんの息子さんが木村家に来られました。写真も残っています。

――手紙の交換などは。

木村　ブルックさんが交換教授で慶応大学に来られた時に叔父と四～五回手紙を交換していたようです。

――最近、木村さんからブルックさんのご子孫に手紙をだされたそうですね。何か新しい発展がありますか。

木村　お返事を頂いたのですが、このことがあって初めて、木村家が所蔵しているブルックさんの写真がなぜあるのかがわかった。つまり、摂津守がブルックさんとアメリカで別れるに際して頂いた写真であることがわかったのです。

――その写真の複写は、昨年夏の米国調査の折りに私どもが差し上げてきました。かわりにといっては何なのですが、このたびの展示のために、ブルック船長あてに出された幕府の礼状、つまり漂流民政吉の送還に対する感謝状ですが、それをお借りし、展示しています。

木村　摂津守をめぐるいろいろな事がわかってきたのは、慶応大学主催の福沢諭吉生誕一五〇年祭がきっかけですね。

――私どもが、木村さんとお付き合いさせていただくようになったのも、それからですね。

ところで、摂津守を知るためには福沢諭吉との関係をまず知る必要があるわけですが、摂津守あるいは、ご子息の浩吉さんと福沢の関係についてお聞きになっていることがありますか。木村家と福沢との関係は、福沢が頼み込んでアメリカ行きの従者になって以来ですね。

木村　安政六年十月末頃、江戸に出てきて間もなく摂津守を尋ねてきたことから始まったようです。

――渡米のほんの数ケ月前ですね。

木村　福沢は桂川家の紹介で咸臨丸乗艦を願ってきたのです。摂津守と桂川家とは、摂津守の姉のくにが桂川甫周に嫁いでいたことから深い関係にあったのです。

――木村摂津守の日記を見ると、福沢は何度か手紙をよこしたり、木村家に来ていますね。互いに明治三十四年に亡くなるのですが、首尾一貫して交流は絶えませんでしたね。

木村　お互いに尊敬し合って、親戚以上の付き合いだったようです。

――学問的なレベルの付き合いもあったようですね。摂津守は明治になって公職には付かず、文筆活動に没頭しており、一方福沢も慶応大学を創設し、文筆活動を行うなど相通ずるものがあったのでしょう。浩吉さんと福沢の交際もこの延長にあるわけですね。

晩年の木村芥舟

浩吉さんは有栖川宮と海軍兵学校で同期で、非常に若くして出世を遂げるのですがなぜか海軍を満期前にやめて、同じような文筆活動をされるのですね。

木村　そうです。浩吉は父思いでして、残された資料を早く整理して世に出したいという気持ちが強かったのでしょう。これだけ大きな事業をやった木村摂津守の存在を世の中に知らせたいという父思いの気持ちから、早く海軍をやめたのではないですか。

――浩吉さんは、文倉平次郎の著した『幕末軍艦咸臨丸』の出版にも力を入れていますね。

木村　そうです。著者の文倉さんも本を出される時には、しょっ中家に来られていました。使われている写真もほとんど木村家から出ています。

――明治二十五年の「毎日新聞」に福沢諭吉が、木村芥舟が書いた『三十年史』について、宣伝を兼ねて二回にわたって紹介していますが、その中で海軍といえば勝海舟という印象があるが、摂津守は海軍にとって忘れられない存在であったと力説しているのです。

木村　福沢もやはり昔、恩になった摂津守を立てたいという気持ちが充分にあったんだと思います。こんな話もあります。明治になって芥舟が、赤十字病院に入院した時も福沢先生がすっかり面倒をみてくれまして、箱根の湯本に木村夫妻を保養に呼んでくれました。福沢先生の家族と一緒にです。昔の恩を忘れないで大切にしてくれました。

福沢諭吉が木村芥舟に送った写真(左は裏)

――当時新進気鋭の人達は競ってアメリカに行きたがったと思いますが、その中で摂津守が頼みを聞き入れて連れて行ってくれた恩義を相当に感じていたのでしょう。

木村　自分が有名になったことを非常に恩義に思っていますね。二年後に遣欧使節、七年後に再度アメリカに渡ったのも咸臨丸乗艦が大きな力になっているのでしょうからね。

――話は変わりますが、摂津守を世に出した外国奉行岩瀬忠震との関係についてですが、摂津守の自叙伝に安政二年九月に浜御殿見習から西の丸目付に抜擢された時のことが書かれていて、ある日突然破格の出世をすることになり、たいへん驚き、さっそく岩瀬に話すと、岩瀬は書き付けを出してきたそうです。それは木村は極めて親孝行であるということなどが書かれている推せん文でして、どういうわけか岩瀬が持っていて、木村に示したというのです。それはともかく、木村は岩瀬に対しては終生尊敬心を失わなかったようですね。

岩瀬と摂津守の親交を裏付けるものは、慶応義塾図書館にある書簡集『旧雨手簡』が重要な資料になると思われます。これまで公表されていなかったのですが、親交関係から幕府政治の機微に触れることまで書かれていて、これからの岩瀬研究はもとより、幕末政治史研究に大きな影響を与えると思います。このたび私どもが編集刊行した『木村芥舟とその資料』の

なかに、詳しい件名目録を載せています。

木村　早く全容が発表されるといいですね。

――今、木村さんがお持ちの資料の中にも岩瀬関係の未公表のものもいくつかあって、非常に面白い資料もありますね。

木村　岩瀬の書いた「正気歌」という大きな掛け軸もあります。

――ところで、岩瀬と木村はどういう関係だったのかたいへん興味がもたれるのですが。きっかけは昌平黌の先輩という関係からなのか、どうか。昌平黌には岩瀬が天保十四年（一八四三）、木村が弘化五年（一八四八）に入っています。木村の同期には、永井尚志、田辺太一、矢田堀景蔵等がいます。

木村　年齢が十二も違うのにこれだけ親密になっているのは、なぜですかね。互いに性格が合った仲だったんでしょうか。

――ところで、木村摂津守の奥さんはどこからお嫁にこられたのでしょうか。

木村　嘉永二年に旗本長谷川鑛五郎の娘やえと結婚したのですが、それには将軍家慶の推せんによったという話を聞いています。

――浜御殿奉行の家ですから当然あり得ることでしょう。その後二十五歳で長崎目付に赴任し、海軍伝習所に関わり、いよいよ咸臨丸に乗ることになるわけですね。アメリカでは、すごい歓待をされたのでしたね。

木村　正使の新見豊前守らは、ただ行って帰ってきただけですが、その点摂津守は、咸臨丸の修理などもあって四十日間も滞在していたので、それを利用して積極的に向こうの家を訪れ、家族と一緒に楽しんだんです。摂津守は音楽でも何でも喜んで理解したが、正使達には野蛮人の音に聞こえたと言っています。また、幕臣の中でも進歩的な考えを持っていたんでしょう。家族の写真も残っていますし、大ていは本人の写真しか撮らなかったのに。

――正使は、ワシントンまで行っているが、木村はサンフランシスコまでしか行っていません。実は浄書本では削っているのですが、稿本の日記ではやはり無念さが書かれています。「華盛頓府（ワシントン）を実見せざるは、極めて遺憾なり」と。

木村　行きたかったのは、当然でしょうね。行きたかったといえば、岩瀬忠震は、井伊直弼によって失脚させられなければ遣米使節の正使になって行ったのでしょうね。ポーハタン号に乗って。摂津守が咸臨丸に乗って行く時は、岩瀬も行きたいと思っていたんじゃないですか。

――そうでしょうね。しかし岩瀬は偉いですね。自分が行けなくなったら素直に渡航を祝えないと思うのですが、遣米を祝って歌を贈っているのですね。

木村　私の家に使節が無事に帰ることを祈るということを扇面に書いて軸装にしたものがあります。

――作事奉行に左遷され、ちっ居を受け悶々とした生活を送っている中でアメリカへ行く人達を送る事ができるという心の広い面を見ることができます。

また、愛知県新城市の滝川一美さんの家には橋本左内に宛てた書簡がありまして、それには開港論を述べるとちっ居どころか首を切られるかも知れない、よくて北海道左遷だろうと予測しながら、それでも自分の論がいずれ生かされればよいのだと書かれています。感動を呼ぶ文書で、「岩瀬」フアンの喜びそうな文面ですね。いずれにしろ、岩瀬の開国・開港にかけた情熱の一端がわかりますね。

木村　摂津守もこうした背景や、岩瀬の気持ちを頭においてアメリカへ行ったのでしょうね。

幕末の木村摂津守を巡る人々の関係を改めて考え直すと、おもしろいドラマチックな話が出てきそうですね。

――その点でも今度の資料の公開の意義は大きいと思っています。展示だけでなく、何らかの形で市民・研究者の方に利用していただく方法をできるだけ早く考えることは、私どもの義務だと思っています。

木村　岩瀬は不思議なことにあまり人に知られていませんね。外交ということは重要なのに、摂津守より知られていないかもしれない。

――旧幕臣の中では岩瀬をほめるものは結構あって、識者の内では知られていたが、一般にはそれ程でもなかった。ただ、島崎藤村の『夜明け前』の中に出てくるんですよ。『夜明け前』を読んだ人は多かったと思うのですが、歴史の上で真正面からとり上げられることが少なかった。それはやはり、関係資料が少なかったからでしょう。

木村　木村家から慶応大学に寄贈した書簡がありますが、その存在があまり世の中に知られてなかったことも多少影響しているかもしれません。

――さっき少し触れました新城市の滝川家には、書簡が一点と書画類六点がありまして、このたびの展示でも一部出陳させていただきましたが、このほか岩瀬の画、詩があるようです。岩瀬の全貌はこれから、だんだんわかってくるのではないでしょうか。

木村　確かに手掛かりにはなりますね。岩瀬は桜の花みたいなもので、パッと咲いてパッと散ったような人物で、勿体ないですね。あれだけ頭の切れた人が。

木村家にしてみればひいおじい様も奉ってきた大恩人で、子孫としても皆に知らしめる必要があると思っています。

――木村家の資料は、今、木村さんの手許にあるものと、慶応にあるものとに大別されますが、著作物が意外に残っていないんですね。

木村　そうなんです。

――先にお話した福沢諭吉が毎日新聞に書いた『三十年史』の紹介の記事に、代表的な著作物三～四点があげられています。寄託していただいた資料にも入っていますが揃ってはないので、今後は著作物の収集を図らなければならないと考えています。

木村　そう、一ケ所に集めなければなりませんよ。それで今回私の方でもずい分力を入れたんです。

――マイクロフィルムによる複製でも統一を図りたいと考えています。我々の責任だと思っています。

木村　開港資料館が仲立ちになってぜひやっていただきたいです。資料が分散しているのは悲しいことですが、今はマイクロという方法もあるし、万一災害にあってもどちらかは残るでしょうから。

――ぜひやらせて頂きたいですね。本日は、長時間にわたりありがとうございました。

（三月九日、横浜開港資料館にて。聞き手は館員の阿部征寛・伊藤久子が、筆記は武部菊夫があたりました。）

「横浜もののはじめ」展余話
ロジャースの回顧談

前回の展示の準備過程で出会った資料に、ロジャースという古参居留民の"Early Recollections of Yokohama 1859－1864"と題する回顧談がある。一九〇三年一二月四日に横浜文芸協会で行なった講演の原稿が、翌五日の『ジャパン・ウィークリー・メイル』に掲載されたものである。これによって多くの事実を明らかにすることができた。

回顧談自体と『ウィークリー・メイル』一九〇六年一二月二九日号掲載の訃報記事、それに居留外国人人名録や墓碑銘によると、ロジャース(George William Rogers)は一八三九年、イギリスの生まれ、一八五九年一二月八日、ニンフ号で上海から横浜へ向かった。時に二〇歳であった。途中遠州掛塚沖で難破し、四名の死者を出したという。『幕末外国関係文書』をみると、生存者は幕府の代官今川要作に保護され、その雇船で大晦日に横浜へ送られている。ロジャースはオリファント商会に勤務するが、同社は一八六一年の半ば頃横浜から撤退した。一八六四年一月帰国、約二〇年後の一八八三年再び来浜し、コッキング商会などで働いたのち、一八九四年独立して輸出入に従事した。一九〇六年のクリスマスに山手病院で死去、享年六七歳、山手外人墓地に埋葬された。訃報記事によると、さほど目立つ存在ではなかったが、傑出した記憶力の持ち主だったという。

回顧談の内容は、一八五九年から一八六四年にかけての最初の滞在期間に見聞した事柄だが、とくに来日直後の一八六〇年頃のことが詳しい。大事件よりも、実際に経験したことや、外国人と交渉のあった日本人についての記述が豊富な点に特色がある。新聞など、他の資料が乏しい時期だけに貴重である。

「横浜もののはじめ」に関わる事柄にしぼり、ロジャースの回顧談によって判明したり、裏付けることのできた事実を紹介してみよう。

●最初のホテル　ナッソウ号の元船長フフナーゲルの創始した横浜ホテルが最初だと記されている。これはかつて筆者がさまざまな資料から推定した結論と一致する。一八六〇年二月二四日の開業である。前部にはマコーリー男爵という黒人が支配人を務めるビリヤード・ルームとバー、後部に食堂と寝室、側面に馬屋があり、馬を賃貸していたという。

●最初の屠牛と食肉業者　横浜にやってきたロジャースらにとって困ったことの一つに、食物の問題があった。一八六〇年の三月か四月、一頭の牛を共同購入し、ヘンリー・エリス号の乗組員、ヘンリー・クックが横浜ホテルで屠畜した。こうして初めて牛肉を口にすることができた。最初の食肉業者はアイスラー・アンド・マーティンデル、それがキャメロン商会、さらにヘンダーソン・アンド・ウェストに継承されたという。食肉業者に関する記述は、他の資料から判明する事実と一致する。

●最初のパン屋　運上所の背後、「お貸長屋」の周辺には、居酒屋(sake shops)、そば屋(macaroni shops)、一膳めし屋(cheap eating houses)が密集しており、その主人の一人が、フランス軍艦ドルドーニュ号乗り組みのコックから手ほどきを受け、日本の小麦粉で「ゆでだんご」のようなパンを焼き始めた。フランス人から教えられたので、横浜ではブレッドではなく、パンと呼ばれるようになったのだという。『横浜開港側面史』に収録されている内海兵吉の談話によると、彼は開港の翌年、本牧から出てきて「お貸長屋」に住み、パン屋をはじめた。「焼饅頭」のようなものができたが、それでもよく売れたという。時期や場所の一致から、ロジャースのいう「日本人のパン屋」は兵吉のことにちがいない。

●最初の洗濯屋　太田町八丁目の角に、最初の洗濯屋(washerman)があった。店の前を流れる小川のなかに大きな丸い石があり、外国人の衣類をそれに叩きつけて洗濯したという。『横浜開港側面史』の鈴木隣松翁談によると、熊本の人渡辺善兵衛は、長崎での経験を生かし、太田町八丁目で洗濯屋を始めた。これが最初だという。ロジャースのいう「最初の洗濯屋」は善兵衛のことであろう。文久二年秋に出版された『横浜はなし』に登場する太田町八丁目の「異人の洗濯屋」も善兵衛のことと思われる。

●最初の新聞　ショイヤーの発行した『ヘラルド』が横浜最初の新聞であり、和紙に書いた版下を日本人の彫師が木版に彫刻し、和紙に印刷して配布された。続いてハンサードの『ヘラルド』が発刊されたという。しかし、前者は『ヘラルド』ではなく『ジャパン・エクスプレス』、その創刊は一八六二年五月二四日であり、ハンサードの『ジャパン・ヘラルド』より遅い。ショイヤーはそれ以前にサーキュラー(商館通信)を発行しており、ロジャースはそれを「最初の新聞」と記憶したのだと思われる。

●最初の職業写真家　フリーマンは横浜居留地最初の雑貨商であるとともに、写真機を輸入した最初の人であり、数か月間自ら肖像写真の撮影にあたった。しかし、その事業をある日本人に譲渡したと述べられている。鵜飼玉川(玉川三次ともいう)の「写真塚の記」に、横浜開港当初「冨麗満」から写真術を伝授されたとあり、また文久元年版の『大江戸当盛鼻競』に「写真・玉川三次」の記載がある。ロジャースのいう「ある日本人」とは鵜飼玉川のことにちがいない。玉川を日本人最初の職業写真家とする説がこれによって裏付けられる。

以上、「横浜もののはじめ」に関わる事柄に限って紹介したが、興味深い記述は他にもある。全体として正確な記述であり、おそらく日記や手控えなど、もとになる資料があったと思われるのだが、今となっては推測の域を出ない。

(斎藤多喜夫)

EARLY RECOLLECTIONS OF YOKOHAMA 1859-1864.

By G. W. Rogers: Read before the Yokohama Literary Society, on Friday, December 4th, 1903.

At the beginning of December, 1859, I left Shanghai in the American barque *Nymph*, Captain Price, bound for Kanagawa, the newly opened port in Japan. We carried a crew of fourteen, all told, and besides there were two passengers who were proceeding thither with the object of settling in business. One of these was a Mr. Sherman

回顧談の冒頭部分

横浜新風土記稿 ③

薪の流通と江戸・横浜

1　はじめに

『横浜新風土記稿』では、これまで二回にわたって江戸時代の海沿いの村々を紹介してきた。その結果、従来あまり知られなかった市域の相貌が明らかになってきた。海沿いの村の中には遠く中国大陸に輸出する「いりこ」を生産する村もあれば、江戸湾を舞台に廻船業で生活する村もあった。つまり、海沿いの村々では、農業生産に依存しなくても食べられる世界、外に広く開かれた世界があったのである。

ところで、これらの村々は、内陸部の農村にとって、外部との窓口になっていた。内陸部で生産された品物は湊を経由して外部に送られ、外部の商品は湊に陸揚げされた後、内陸部に送られた。つまり、内陸部農村が成り立っていくためには、近くの湊を通じて流通の世界と関与していく必要があったのである。

にもかかわらず、海沿いの村々と内陸部農村とのこうした経済的な関係はほとんど明らかになっていない。これは、流通関係の史料が少ないことによっているが、江戸時代の市域を考える上で、最も大きな課題の一つであろう。そこで、本稿では、市域農村の主要産物の一つであった薪を題材として、湊と内陸部農村との関係を考えてみたい。さらに、農村や湊と江戸や開港場との関係についても言及したい。本稿を通じて、薪の生産と流通が少しでも明らかにできれば幸いである。

2　市域の薪生産と流通

まず、市域の山林と薪生産の実態を検討しよう。第1表は、市域を含む四郡の山林の面積を示すものである。

数字は明治十年代後半のものであるが、江戸時代も、ほぼ同様であったと思われる。さて、四郡の山林の面積合計は一万七千町歩に達し、この地域には広い山林があったことが分かる。これらの広い山林は耕地と耕地との間に位置し、低い丘陵や斜面に広がっていた。一つ一つの山林の面積は小さなものであったが、ほとんどすべての村が山林を所有していた。

（第1表）　山林の面積

郡　名	面　　積
久良岐	2835 町 0 反 7 畝04歩
橘　樹	4012 ・2・9・21
都　筑	5901 ・4・1・11
鎌　倉	5175 ・1・6・24
合　計	17923 ・9・5・00

明治17年『神奈川県統計書』

山林には、クヌギ・コナラなどの雑木が計画的に植林され、村々で使用する薪炭材が伐採された。また、村によっては冬期に大量の薪を生産し、各地に販売するところもあった。特に、湊に近い市域南部の村々では、薪の販売が盛んに行われた。

ちなみに、幕末期の上大岡村（港南区）のある農家では、一町二反の雑木林から、三四〇束の薪・二〇〇束のそだ（伐り取った木の枝のこと）・三〇束の葉を伐採しており、これらを販売することによって、五両以上の収入を得ることができた。現金収入の少ない農家にとって、薪の販売は貴重な収入源であったのである。

また、この地域全体で、どれほど薪が生産されたのかは不明であるが、薪の積出湊の一つであった芝生村（西区）だけでも、年間数万束が出荷されたといわれている。

では、こうした薪はどこへ送られ、どこで消費されたのであろうか。次に掲げる文書は、文化七年（一八一〇）一月段階での薪の流通について記したもので、薪荷主が幕府に提出した文書である。

（史料1）

（前略）私共儀は武州・相州浦辺在村之薪荷主にて旧来山方致仕入、農業之間、薪荷物買立、追々致積入、江戸問屋共より薪仲買江売捌、前々より仲買江売捌申候値段帳面を以、勘定相立、金壱両に付、口銭弐匁壱分宛、問屋共方へ引取、端銀残之儀、金壱両に付、六拾匁、銭時之相場を以、勘定取引、年来相互に渡世仕来候、（後略）（横浜開港資料館所蔵『浜田家文書』）

この文書によれば、武蔵国・相模国で生産される薪は、江戸の薪問屋に送られていた。この地域の荷主たちは山の所有者から薪を購入し、江戸の薪問屋に販売を委託した。一方薪問屋は仲買商に薪を売り、価格に応じた手数料（口銭）を取得した。こうして薪は江戸市中に広く売り捌かれ、燃料として消費されることになった。

ところで、この文書には七〇名もの薪荷主が名を連ねている。第2表は文書に記載された薪荷主の一覧であるが、宿場や湊を中心に多くの「薪商人」がいたことが分かる。特に、現在の神奈川区から磯子区（橘樹郡・久良岐郡）にかけて、多くの「薪商人」が居住し、この地域が薪の流通をめぐって、江戸と密接に結びついていたことが判明する。

次に、第3表は、文書に記載された江戸の薪問屋の一覧である。江戸の薪問屋の総人数は数百人に達するが、文書には一六人が記されている。おそらく、この一六人が市域の薪を扱った中心的な問屋と思われる。

3　江戸での薪炭の消費

以上のように、市域の「薪商人」にとって江戸市場は大きな位置を占めていたが、江戸からみれば、市域の薪・炭はほんの一部分の需要を満たしているにすぎなかった。

江戸全体で消費される薪・炭の量は莫大なもので、安政三年（一八五六）の記録によれば、年間一八三七万束余の薪・七四九万束余の材木・二四七万俵余の炭が消費されている（『東京市史稿』市街篇44）。

また、江戸へ薪・炭を出荷する地域も大変多く、この記録では薪の特産地として相模・伊豆・上総・安房・下総をあげている。さらに、炭の生産地の中には紀州の熊野などかなりの遠隔地もみることができる。

では、武蔵・相模の薪は、江戸市場でどういった位置を占めていたのであろうか。残念ながら、出荷量については分からないが、価格についてはいくつかの記録がある。

（第2表）　江戸に薪を出荷した荷主

No.	郡名	村名	名前	No.	郡名	村名	名前
1	橘樹	神奈川宿	庄次郎	36	久良岐	不明	与兵衛
2	〃	〃	半右衛門	37	〃	〃	藤助
3	〃	〃	喜八	38	〃	〃	安左衛門
4	〃	〃	八郎兵衛	39	〃	〃	文五郎
5	〃	〃	又蔵	40	三浦	浦郷	弥三八
6	〃	〃	小八	41	〃	〃	弥三郎
7	〃	〃	五兵衛	42	〃	田浦	弥三左衛門
8	〃	〃	七兵衛	43	〃	〃	七左衛門
9	〃	保土ヶ谷宿	孫兵衛	44	〃	不明	奥治郎
10	〃	〃	平八	45	〃	〃	長五郎
11	〃	〃	七三郎	46	〃	〃	忠兵衛
12	〃	〃	利右衛門	47	〃	〃	権八
13	久良岐	吉田新田	七蔵	48	〃	〃	五七
14	〃	戸部	権十郎	49	〃	〃	平蔵
15	〃	中村	三左衛門	50	〃	〃	曽右衛門
16	〃	横浜	源五郎	51	〃	〃	庄兵衛
17	〃	〃	作五郎	52	〃	〃	長五郎
18	〃	〃	六兵衛	53	〃	〃	庄治郎
19	〃	本牧本郷	松之助	54	鎌倉	片瀬	海蔵
20	〃	根岸	紋治郎	55	〃	〃	治右衛門
21	〃	〃	伝右衛門	56	〃	坂の下	三左衛門
22	〃	磯子	清三郎	57	〃	〃	九右衛門
23	〃	〃	彦右衛門	58	〃	〃	利兵衛
24	〃	森公田	弥七	59	〃	永谷	半五郎
25	〃	〃	与兵衛	60	〃	大町	庄兵衛
26	〃	〃	清四郎	61	〃	〃	久七
27	〃	森中原	七兵衛	62	〃	不明	源四郎
28	〃	〃	忠兵衛	63	高座	鵠沼	弥五右衛門
29	〃	杉田	治郎右衛門	64	〃	辻堂	治郎兵衛
30	〃	〃	伝兵衛	65	〃	藤沢宿	源七
31	〃	富岡	吉左衛門	66	〃	柳島	善左衛門
32	〃	〃	由兵衛	67	淘綾	山西	善八
33	〃	〃	源左衛門	68	〃	〃	平兵衛
34	〃	〃	角右衛門	69	〃	二の宮	平七
35	〃	不明	太郎兵衛	70	不明	不明	源左衛門

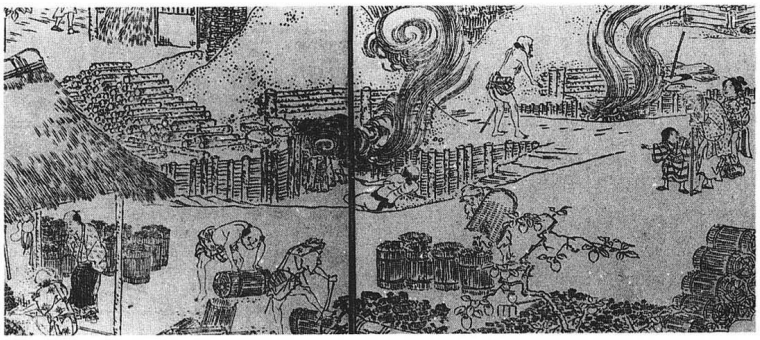
（第3表）　江戸の薪問屋

居住地	名前
鉄砲洲十軒町	利兵衛
明石町	平助
〃	友七
芝金杉	伊兵衛
〃	平左衛門
芝湊町	五兵衛
〃	太左衛門
南八丁堀	利兵衛
〃	与市
本八丁堀	金蔵
〃	藤七
南小田原町	六左衛門
鉄砲洲本湊町	長兵衛
亀島町	佐治兵衛
本所林町	宗助
芝新網町	久兵衛

たとえば、元治元年（一八六四）の記録では相模産の樫の江戸小売価格が、一両で八五束であったと記されている（『旧幕府引継書』）。この価格を薪の特産地であった水海道（茨城県）や壬生（栃木県）の極上の樫と比較すると、三分の一から四分の一の安い価格になっている。この記録から見る限り、この地域の薪はそれほど良質なものではなかったようである。

4　横浜開港と市域の「薪商人」

以上、市域の薪生産と江戸との関係を概観したが、次に横浜開港と市域の薪流通について検討しよう。2節で述べたように、市域の薪生産は江戸向けのものであったが、こうした情況は横浜開港後、大きく変化する。その原因は横浜での人口急増とそれに伴う薪需用の拡大にあり、市域の「薪商人」は、横浜開港後、出荷先を江戸から横浜へ変えていくことになる。



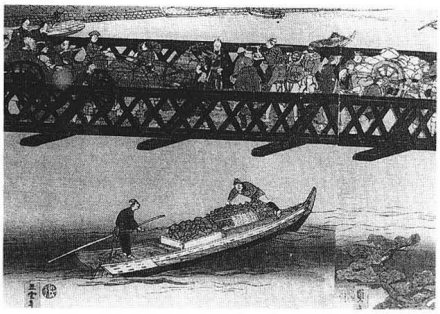
江戸近郊農村での炭の生産（現在の東京都国分寺市）

ここでは、そうした「薪商人」の活動を、森公田村（磯子区）の「薪商人」・斎藤家を題材として検討してみたい。まず森公田村と斎藤家ついて簡単に紹介しよう。

森公田村は久良岐郡の南部に位置し、江戸湾に面した半農半漁の村である。この村には多くの船乗りと漁民が居住し、地域の物資輸送に重要な役割を果たしていた。

次に、斎藤家は森公田村の旧家で、「廻船問屋」と呼ばれた家である。同家が廻船業に携わるようになったのがいつなのかは詳らかではないが、天保一三年（一八四二）には「廻船問屋」として百両の御用金を上納するように旗本領主から命じられている（『斎藤清四郎家文書』。以下、斎藤家については同家文書による）。

また、斎藤家は「薪商人」としても早くから活動し、先に掲げた



吉田橋周辺で荷物を運ぶ廻船

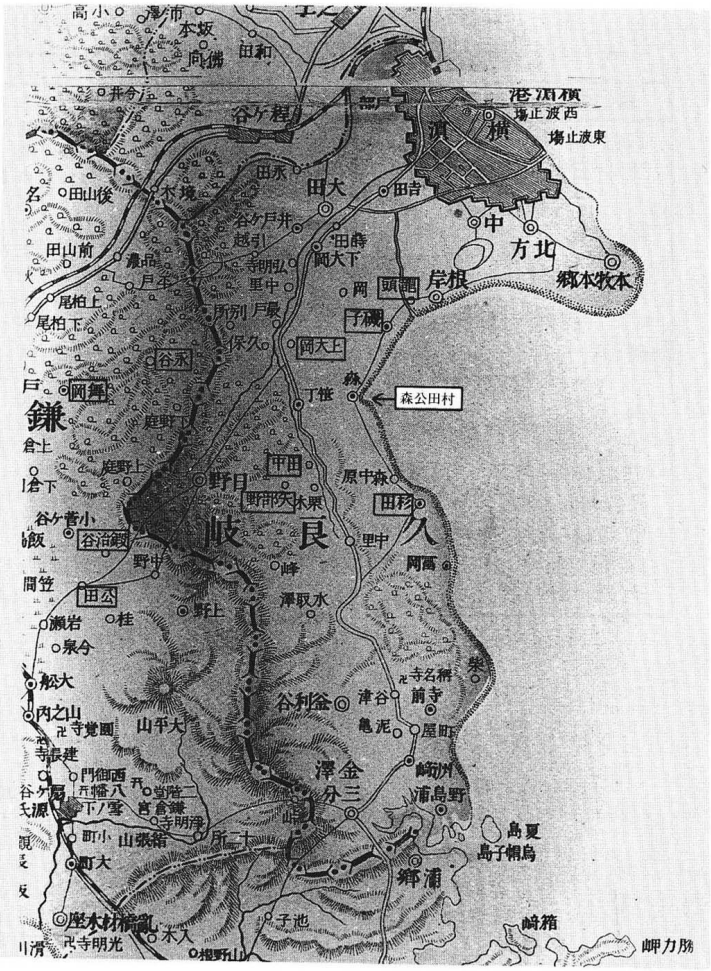
文化七年（一八一〇）の文書には「森公田村・清四郎」（第2表のNo.26）と記されている。さらに、同家は、横浜開港後、横浜向けの薪を大量に出荷する荷主の一人になっていった。

その活動は大変活発なもので、自ら所有する山林から薪を伐り出すだけでなく、近隣の「山持ち」からも薪を集荷し、横浜での需要に応じている。

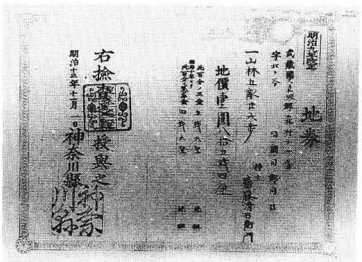
まず、斎藤家の山林であるが、明治初年には村内の山林（六二町歩余）のかなりの部分が同家の所有になっていたと思われる。現在、同家には当時の『薪伐り出し帳』が多数残されているが、冬期に人を雇って大量の伐採をしている様子をうかがうことができる。

また、近隣の「山持ち」からの集荷は、ほぼ五キロメートル四方に位置する村々から薪を購入している。第4表は、斎藤家が明治初年に取引関係を持った村の一覧であるが、同家の取引地が磯子区・港南区・戸塚区・栄区に広がっていたことが分かる。これらの村々の薪は馬を利用して森公田村の斎藤家まで送られ、そこから船に積み替えられ、横浜に集荷された。森公田村からの船輸送には横浜の運送業者があたったようで、当時の「荷送り状」には海岸通五丁目の伊勢善・元町の石川又四郎・山形屋直吉などの名前をみることができる。

また、斎藤家が取引した横浜の薪問屋としては、元町の田辺源五郎・同永蔵・田沢屋又右衛門・松川屋弥三郎・野毛町の森田屋弥三郎などがいた。各地から集荷された薪は、これらの問屋を通じて市中に送り出されていった。



森公田村と斎藤家の取引地



斎藤家の山林所有を証明する地券

（第4表）　斎藤家の取引地

村名	現在の区	村名	現在の区
瀧頭	磯子区	吉原	港南区
磯子	〃	松本	〃
矢部	〃	上永谷	〃
田中	〃	鍛冶ヶ谷	栄区
杉田	〃	公田	〃
関大	港南区	舞岡	戸塚区
上岡	〃		

『斎藤清四郎家文書』

5　おわりに

以上、4節にわたって、従来触れられることがなかった市域の薪生産と流通について検討した。その結果、市域の村々が江戸湾岸の湊を通じて、かなりの量の薪を江戸に販売していたことが判明した。

市域の村々は政治都市である江戸を支えるために、さまざまな役割を負わされてきたが、薪の生産と出荷もそうした役割の一つだったのである。一方、市域の人々にとっても、薪の生産と販売は貴重な現金収入であり、江戸と市域は薪流通をめぐって密接に結び付いていくことになる。

しかし、こうした関係は横浜開港によって大きく変化していく。幕府は開港場の周辺地域が横浜に消費物資を供給することを期待し、周辺地域の人々も、新しく出現した巨大な消費地を歓迎した。こうして、市域の村々は、江戸時代初頭から江戸と結んでいたのと同様の関係を横浜との間で作りあげていくことになった。おそらく、薪以外の消費財や食料についても同様の情況が展開したと思われるが、詳しくは今後の課題にしたい。

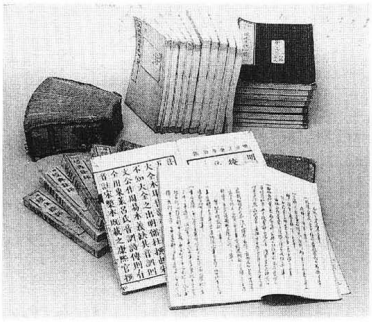
（西川武臣）

資料よもやまばなし

二冊の和本をめぐる話

――佐久間亮一家旧蔵和本のうちから――

横浜開港資料館には、鶴見区の佐久間亮一家から寄贈された六八四三点にのぼる地方文書がある。佐久間家は、江戸期には名主、明治・大正期には村会・郡会・県会議員、昭和期には衆議院議員など歴代にわたって地方・中央の政治にたずさわり、経済的にも地主経営をはじめ、果樹・蔬菜栽培、味噌醸造など幅広い活動を続けてきた鶴見の旧家であり、その文書・記録類は、佐久間家のみならず当地域の近世から近代にわたる政治・経済を知るうえでの貴重な資料となっている。



さらに佐久間家からは、これら文書・記録類とは別に、和本約四〇〇冊を含む一六〇〇冊余りの蔵書も寄贈されている。これらの蔵書は、もちろん何か特定の目的があって収集されたものではなく、代々にわたる一族の人々によって、勉学に実用に娯楽に使用されたものがランダムに伝えられたものであり、その意味では、文書・記録類のように、当時の社会を直接実証する歴史資料とはなりにくい。しかし、一冊一冊の本は、それなりにそれを所持した人の面影を伝えていたり、その本が刊行されていた時代の思いがけない事実をかいま見せてくれたりして、文書・記録類とはまた違った側面に光を当てる捨てきれない楽しさがある。ここではそんなエピソードを二つ紹介してみよう。

『孟子』に書込まれた塾名

ここに一冊の和本がある。朱熹集註『孟子　三』である。すでに初版は明和年間に上梓されているが、ここにある本には刊記はなく、慶応改正という角書から慶応以降に出版されたものであることがわかる。『孟子』は、江戸時代を通じて四書の一つとして広く普及していたものであり、本そのものに、とくに資料的価値があるわけではないが、筆者がひきつけられたのは、この本の表紙カバーにある所持者の書込みであった。

丁寧に掛けられた白い和紙のカバーの上には、中国の文人を思わせる似顔絵やその他雑多な落書きとともに「東京第二大区小七区四小区飯倉狸穴町四番地高須正路醉経堂塾」との書込みがある。この本の所持者は、他の経書（佐久間家旧蔵和本のなかには『孟子』の他に『易経』『詩経』などもある）への同様の書込みから、佐久間家第一五代当主となった佐久間亮弼であることがわかる。

佐久間亮弼、文久元（一八六一）年四月生れ、はじめ文平と称し、のちに佐久間家歴代の当主名権蔵を名のる。その青年時代の自由民権運動とのかかわりは、すでに当館の展示で一部紹介されている（情報ファイル『自由民権期の横浜』参照）。

『孟子』は、いろは四十八文字に始まり、『庭訓往来』『実語教』のような往来物を経て、『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四書へと進む、当時の一般的な寺子屋教育における上級課程の教科書である。従って、書込みはおそらく、亮弼が少年期に学んだ塾名と住所であろう。とすると、波乱に満ちた時代を背景に多感な青年期を送った亮弼の、少年時代の一端を浮かび上がらせることができるかもしれない。そんな思いで、明治初年の大小区制施行後の住所を手掛りに塾の存在を調べてみた。

明治五（一八七二）年に制定された学制以降、東京府では、家塾・私塾は届出と認可が必要であった。そこで、それらの開業願が収録されている『東京教育史資料大系第一巻』（東京都立教育研究所発行）を調べてみると、書込みの住所と同じ塾が掲載されている。

家塾開業願

第一条　学校位置　東京府管下第二大区小七区飯倉狸穴町拾五番地之内四番地

第二条　学費費用　無之

第三条　教師履歴

濟松（ママ）県士族　高須正路

六十三歳

文政元寅年故幕府書物同心岩崎多左衛門江入門朱子流学教授ヲ受ケ引続キ天保元寅年御当地処士長野友太郎江入門作詩文教授ヲ受ケ同人没後□□□江相談仕候

第四条　教師給料　無御坐候

第五条　学科　習字　筆道

（中略）

右之通開業仕度此段奉願候也

明治六年　第二大区小七区飯倉狸穴町拾五番地之内四番地

浜松県士族　高須正路　㊞

東京府御庁

―明治六年　開学願書―

生徒人員

十四歳以上十六歳迄　男七人

十九歳以上　男二人　総計九人

―明治六年開学明細調―

醉経堂という塾名はないが、塾長高須正路の名前も同じである。総計九人（明治六年当時）、学科は「習字筆道」と少なく、塾則も単純。学制のもとで、東京府が近代的初等教育に整合すべく、届出を義務づけた数多くの家塾の一つであったのだろう。

醉経堂という塾名の「醉経」とは経書に心酔するの意であるから、この文字から今日の感覚でこの塾長が酒を愛したなどと推測することは明らかに誤りである。しかしそれにしても、中国の儒者にならい自らの塾を醉経堂と名付けた巷間の老儒者高須正路翁と、数人の同門の仲間・師の家で起居をともにし、教科書に落書きをした少年佐久間亮弼と高須正路との邂逅、それが亮弼にとってどのようなものであったかは、いましばらくの謎とし、今後の課題としよう。

『鼇頭挿画(角書)校正王代一覧』の蔵書印と払い下げ印

佐久間家旧蔵和本のなかに『鼇

頭挿画(角書)校正王代一覧』(以下『王代一覧』と略す)という本がある。巻之一から七下まで七巻八冊、江戸時代の儒者林鵞峯(春斎)著、慶安五(一六五二)年脱稿、寛文三(一六六三)年刊行の『日本王代一覧』の校正復刻版(西野古海校)で明治六(一八七三)年東京須原屋茂兵衛刊(協力舎蔵版)の和本である。これは、林鵞峯が、神武天皇から正親町天皇までの歴代天皇をはじめとする為政者の治績を年代記風にまとめた史書である。

筆者が注目したのは、これもまたこの本そのものよりも、そこに捺印された蔵書印であった。表紙を開くと、「第一大学区開成学校図書」という蔵書印が押されている。さらにその上には小さな丸形の印判で「東京大学・法理文三学部・図書払下之印」が押されている。

佐久間家蔵書のなかには、この他にもさまざまな旧蔵者の蔵書印が見られ、このことはこれで一つの興味深い事柄であるが、それはさておき、この「第一大学区開成学校図書」の蔵書印の押されたいわゆる「東京大学」印記本が、どのようないきさつで佐久間家の手に渡ったのかを考えてみたい。

東京大学が第一大学区開成学校と呼ばれたのは、明治六年四月から、同七年五月東京開成学校と改称されるまでのわずか一年足らずの間である。『王代一覧』はこの間に東京大学の図書となったことになる。しかしこの時期、開成学校は、英語を通じての専門予備教育が中心であり、歴史の授業は、外国人によって担当されていた。従って『王代一覧』は、一般教養書として入手されたものであろう。なお付言すれば、他の「東京大学」印記本によく見られるように、「明治八年購求」、「明治九年文部省交付」とかの印はなく、入手のいきさつをこれ以上知る手掛りは今のところない。

では、『王代一覧』は、いつ、なぜ東京大学から払い下げられたのであろうか。

東京大学は、その後、東京開成学校から明治一〇年四月に東京大学へ、さらに同一九年三月には帝国大学へとその名称を変えていく。従って「東京大学・法理文三学部・図書払下之印」は、帝国大学と改称される以前、つまり明治一〇年四月から同一九年三月までの間に押されたことになる。

この時期の東京大学の歴史をさぐる一次資料の一つに『文部省往復』という資料がある。太政官・宮内省・式部寮・文部省などから

の達、文部省内の各局への伺、上申、届がまとめられた資料である。この資料の明治一〇年から一九年までの分を見ていくと、書籍購入の件や納本の件はあるが、払い下げの件は見つからない。

東京大学の物品の払い下げに関する規則から見ると、明治一一年の事務章程には、「綜理之ヲ専行スルヲ得」る事項として「不用ノ厦屋ヲ取毀不用ノ図書器械物品草木等ヲ売却スル事」とある。職制改訂のあった明治一四年以降の同じく事務章程でも、一件につき三〇〇円未満の金額の「学術上ノ」「図書ヲ購入交換若クハ売却スル事」(以上引用は『東京大学百年史 資料一』による)は、法理文と医学部を統轄する「総理」の、文部卿の裁可が不要の権限とされている。つまり、相当量(当時の歴史書は一冊一〇銭から一円程度)の図書が一括して売却されない限り、東京大学の記録には残らなかったのであろう。しかも、もし仮りに記録があったにしても、明治一九年に文書保存規定ができる以前は、庶務進行上必要な書類しか残さなかったという状況もあったのである。

払い下げ印押捺の時期をもう少し特定できる資料はないだろうか。ここで、図書館の状況を見てみよう。明治一四年六月、東京大学は、法理文三学部と医学部の緩い統合体から一人の総理によって管理される統一的な大学へと組織編成上

の大きな改変があった。これにともない、図書館も機構上三学部と医学部の二部門併置から一元化され、蔵書印も「東京大学法理文三学部図書」「東京大学医学部図書」の併用から、全学共通の「東京大学図書之印」に変わる。さらに、この時「東京大学図書消印之証」という除籍の印もつくられた。この前年一三年一二月には、東京大学で二度目の図書目録『東京大学法学部理学部文学部図書館和漢図書目録』が作られ、『王代一覧』はこの時まだ所蔵されていた。

従って、『王代一覧』の「東京大学・法理文三学部・図書払下之印」という印は、明治一四年の職制改訂以前の半年ほどの間に押されたことになろうか。

明治五年に学制が制定されたものの、財政的裏付けのないまま出発した官立学校のなかで、東京大学とてもその例外ではなかった。明治一〇年の西南戦争後の物価上昇、さらに一三年の松方財政のもとで、東京大学の財政危機は進行する。一方学科編成上、東京大学は、この頃からより高次の専門教育機関たることをめざしていく。このような時期に、儒者の著した一般教養書的な『王代一覧』のような歴史書が払い下げられたことは、ある意味で必然であったと言ってよい。払い下げられた『王代一覧』は、その後おそらく、何人かの手を経て在村の知識人層の教養書にふさわしいものとして、佐久間家に迎えられたのではないだろうか。

おわりに

今回は、佐久間家旧蔵和本の全体の内容や佐久間家の文化活動のなかでの読書の果たした役割などには触れなかった。それを知るには、佐久間家の蔵書内容の検討だけではなく、横浜市域に残されている和本の収集・整理から始まる、厖大な作業を伴う和本の研究が必要であろう。そのなかで、天明期以降に興隆してきた江戸出版業と近郊農村における本の流通や読者との関係、在村知識人層の教養のあり方なども考えていかなければならない。

戦後の村落史研究や地方史編纂のなかで、こうした蔵書類は地方文書の蔭に隠れてともすれば見過ごされてきたが、過去の人びとの文化的生活を明らかにするうえで、これらの蔵書類にも光を当てていくことが必要となってきている。

代々にわたってその蔵書を大切に保存されてこられた佐久間家に感謝の意を表し、この小文を終わりとしたい。なお、佐久間亮一家旧蔵和本は、その他の蔵書も含め、今年度中に整理を終え当館にて公開する予定である。

(吉田えり子)

横浜人物小誌 ⑯

鍛きあげの水道マン 斎藤久慎

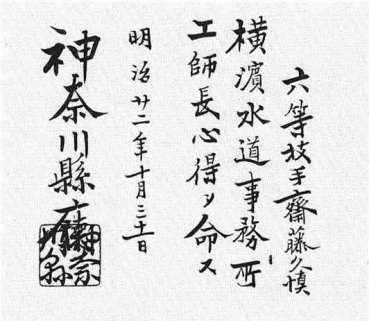
昨年八月から当資料館で開催された『横浜水道一〇〇年記念水と港の恩人H・Sパーマー』展で、パーマーを援けた人々のひとりとして斎藤久慎（ひさちか）（一八五四～一九一一）を紹介した。横浜創設水道工事で上川井・野毛間の第三工区を担当した技術者である。紹介が可能となったのは、御遺族の斎久工業株式会社社長斎藤久典氏から貴重な資料を御提供いただいたことによる。

●略歴

斎藤久慎は、安政元年兵庫県但馬国出石郡出石に生まれている。明治一五年神奈川県に奉職するまでは、『神奈川県史料』中の官員履歴によってその経歴を知ることができる。明治八年豊岡県地租改正係雇を皮切りに、同県租税課常務係、豊岡県被廃に伴い兵庫県租税課雇を経て、明治一二年二月同県土木課雇となる。同年四月「澱（淀）川粗朶伝習」を申付けられており、この時土木工事の実地を本格的に修習したものと思われる。神奈川県時代は久典氏から御提供を受けた辞令書によって正確な官歴が判明する。以下に列記する。

斎藤久慎

明15・4・13 任神奈川県十等属、土木課勤務
4・15 東海道筋管下各郡出張
7・12 都筑橘樹郡巡回
8・24 管下東海道筋各郡巡回
9・9 南北多摩津久井郡巡回
9・25 管下各郡巡回
12・20 任神奈川県九等属
明16・1・12 土木課修路係
1・16 南多摩津久井郡巡回
2・14 橘樹久良岐鎌倉大住淘綾足柄下郡巡回
2・23 三浦郡出張
3・19 管下各郡巡回
4・25 埼玉県出張
12・3 南多摩橘樹久良岐郡巡回
12・27 任神奈川県八等属
明17・1・15 橘樹都筑南多摩郡巡回
2・21 管下多摩川筋巡回
3・14 橘樹郡溝ノ口村出張
3・19 橘樹郡小向井村出張
3・21 久良岐郡急行巡回
3・26 南多摩郡蓮光寺村巡回
明18・1・12 参謀本部測量局出張
1・19 足柄上郡吉田嶋村出張
3・30 足柄下郡芦ノ湯村出張
4・20 橘樹郡程ヶ谷駅出張
4・23 久良岐鎌倉郡巡回
5・18 水道新設委員
7・10 土木課修路係差免水道新設委員専務
12・24 任神奈川県七等属
明19・9・9 任神奈川県属、判任官六等第二部水道局員
明20・12・14 任神奈川県六等技手、横浜水道事務所員
12・19 高坐郡大島村在勤
明22・10・31 帰庁、横浜水道事務所工師長心得
6・26 選任横浜市水道技手、工師長心得
明25・13・19 依願免技手



その後、明治二六年四月一日東京市水道工手となり、中島鋭治指揮下の東京市創設水道工事に従事、竣工後も淀橋浄水場長として水道維持に努めた。日本水道界の巨頭中島鋭治門下に入ったことで、『中島工学博士記念日本水道史』（昭和二年）中の「関係技術者」にも斎藤久慎は採りあげられている。「東京市水道拡張工事、水道誌編纂、水道給水規則、其他水道に関する諸規程の改正事務、日比谷公園造園、市区改正事業、東京勧業博覧会等に委員又は兼務として関与し、（中略）又明治40年より同44年に至る間、宮内省の水道工事担当嘱託を受け、中島博士監督の下に宮城水道の改築、日光御用邸水道、箱根塔ノ沢御用邸水道等の築造に従事して大いに声名を挙ぐ。氏は資性剛直敢て人に阿らず、厳正自ら持し人皆畏敬す、又淡白善く人と交り友愛の情最も厚し。明治44年6月職を辞し同11月病に罹り翌45年2月8日遂に永眠せらる。行年59」（『日本水道史』102頁）。

●離浜

明治二四年一〇月、横浜市は水道改良・拡張を政府に出願した。計画立案にあたったのは横浜市水道技手工師長心得斎藤久慎である。「取入所ヲ道志川筋ニ於ケル弁天淵ト称スル所ニ移シ全所ヨリ鉄管ヲ以テ相模川ニ至リ、鉄橋ヲ架設シテ全川ヲ渡リ、在来ノ線路ニ接続シ、以下第一区線路内隧道ニシテ鉄管ノ伏設ナキ場所ヘ鉄管ヲ通シ、都岡村ニ貯水池ヲ設ケ、野毛山ニ沪水池ヲ増置シ、以テ蒸汽力ニ頼ル所ノ現在ノ取入口ヲ廃スルノ方針」（『横浜市水道誌』）で工費一六万六、〇七〇円余の改良計画であった。しかし、これは内務省に設計変更を求められ結局政府の許可するところとはならなかった。創設工事費の償還が重くのしかかっていたのである。対策を迫られた横浜市は、横浜紳商の大物であり政府とも太いパイプをもつ原六郎を横浜水道事務所長に据えて人事の刷新を図り、大蔵省属官小林忠之を引き抜いて主幹にあて、創設以来の谷野遠主幹と斎藤久慎工師長心得を更迭したのである。この人事は巷間では「横浜水道内部の紛問」とみられ、とりわけ斎藤久慎の免職を惜しむ声が強かった。「斎藤技手は水道事業に対し殆んど身を犠牲に供して勉強したる人にして其技術の点も天晴れ精妙との評なれば同氏を再び技術長として雇い入るる方宜しからんと思ふ」（『自治』第2号明治26年3月）というようにである。横浜水道は、パーマーや三田善太郎らの学士技師の功績のみならず、斎藤久慎のように鍛きあげの水道マンによって支えられていたことも心に留めておかねばならない。（良）

明23・3・31 非職

閲覧室から

今回は、当館所蔵の図書のなかから、幕末期に来日したアメリカ人とその関係者の著作物をいくつか紹介したいと思います。

まず、『マクドナルド「日本回想記」インディアンの見た幕末の日本』（ラナルド・マクドナルド著　ウィリアム・ルイス、村上直次郎編　刀水書房　昭和56年）があります。白人の父親とインディアンの母親との間に生まれたマクドナルド（一八二四―一八九四）は日本に関心をもって、一八四八年、鎖国中の日本に上陸します。そして、幕府に捕らえられ翌年送還されるまでの長崎での約七ケ月にわたる幽閉生活の間、森山栄之助らオランダ通詞たちに英語を教えたことなどを、後年回想録としてまとめたものです。この森山は、一八五四年、M・C・ペリー提督の再度の来航の際通訳として江戸に呼ばれ、その後も活躍します。

東インド艦隊司令長官M・C・ペリー（一七九四―一八五八）は、一八五三年フィルモア大統領の親書を持って浦賀に来航し、幕府に開国をせまり、翌年再度来航し日米和親条約を締結します。この間の記録をまとめたのが有名な、『ペルリ提督日本遠征記』（F・L・ホークス編　鈴木周作訳　大同館昭和12年／土屋喬雄、玉城肇訳　弘文荘　昭和10・11年　2冊／土屋喬雄、玉城肇訳　岩波書店　昭和28・30年　岩波文庫　4冊）で、日本の開国の交渉過程を知る上で、貴重な資料と言えましょう。ただし、原本三巻のうち、第二巻（自然科学および諸調査の報告書）と第三巻（天体観測と水路図）をのぞく本文のみの翻訳となっているので、複製本も参照してください。この公式記録以外のものも含むペリー自身の記録には、『ペリー日本遠征日記』（ロジャー・ピノオ編　金井圓訳　雄松堂出版　昭和60年　新異国叢書）があります。このほか、遠征に同行した画家ハイネの『ハイネ世界周航日本への旅』（ハイネ著　中井晊夫訳　雄松堂出版　昭和58年　新異国叢書）もあります。

ペリーの後、T・ハリス（一八〇四―一八七八）が一八五八年、日米修好通商条約を締結しました。彼のものとしては、『日本滞在記』（マリオ・E・コセンザ編　坂田精一訳　岩波書店　昭和54・55年　岩波文庫　3冊）が知られています。これは、一八五五年から一八五八年までの日記です。条約締結前に記述が終わってしまいますが、『ヒュースケン「日本日記」』（H・C・J・ヒュースケン著　青木枝朗訳　昭和46年　校倉書房）とともに交渉の様子がうかがえ、興味深いものです。そして、この日米修好通商条約批准書交換のため派遣されたのが、万延元年遣米使節でした。

以上の図書は閲覧室開架書架にあります。ご覧ください。

（上田由美）

資料館だより

行事開催予定（昭和六三年度）

▼展示

(1)『サムライ太平洋を渡る――遣米使節と咸臨丸』
5／11～7／31　万延元年（一八六〇）に派遣された遣米使節について、護衛艦咸臨丸の提督木村摂津守に焦点をあてて紹介する。

(2)『フランスの絵入り新聞にみる日本』
8～10月　フランスの絵入り新聞、『イリュストラシオン』や『ル・モンド・イリュストレ』のさし絵を中心に、フランスに伝えられた幕末・明治の日本の姿を紹介する。

(3)『横浜の宿場と湊』
11～1月　東海道の宿場と横浜を横切る諸街道、そして諸河川利用の流通の歴史をみる。

(4)『浮世絵師の描いた横浜開港』
昭和64年2～5月　開港期の横浜風景のほか、茶・生糸・石鹸等の商標をデザインした浮世絵師達の足跡を紹介する。

▼歴史講演会

「横浜開港、そして瀬谷の村々」
講師・内田四方蔵（郷土史家）日時・5／29（日）13時30分～16時
場所・瀬谷地区センター（瀬谷区瀬谷三―一八―一）入場無料

▼横浜開港資料館講座（当館講堂）

(1)「サムライ太平洋を渡る」展関連講座　6／18・25、7／2・9・16　各土曜日全5回　13時30分～15時　講師　未定

(2)横浜歴史講座「横浜の外国商館」
横浜にあった外国商館や銀行、海運会社の考察を通じて、幕末・明治期の世界貿易について考える。
9／3・17、10／1・15・29　隔週土曜日全5回　講師　未定

(3)資料講読講座「アメリカ人宣教師の手紙（英文）を読む」S・Wウィリアムズの手紙を講読し、幕末・明治期の日本と中国の歴史について考える　10／8・22、11／12・26、12／10　隔週土曜日全5回　講師・加藤祐三（横浜市大教授）

(4)「横浜の宿場と湊」展関連講座
昭和64年1／14・21・28、2／4・11　各土曜日全5回　講師未定

ミニ情報

▼寄託資料

(1)木村芥舟（摂津守）関係資料
九六〇点（鶴見区北寺尾　木村昌之氏）一頁参照

(2)森兵五家文書　一、二八六点（金沢区釜利谷町　森兵五氏）

▼閲覧可能複製資料

(1)金沢区釜利谷町　森兵五家文書

(2)港北区綱島東　池谷光朗家文書

▼映画

(1)『知られざる史跡巡り――西区編――』16ミリ・カラー15分

(2)『横浜もののはじめ』　16ミリ15分

＊　＊　＊　＊

▼当館は、六月二日に開館満七周年を迎えます。四頁ではじまった「開港のひろば」も今号から一二頁となり、当初の三倍になりました。増頁を機会に、これまで普及誌『たまくす』に掲載していた「横浜新風土記稿」を本紙に移しました。引き続きご愛読をお願いします。